

リチャードゴードン著、倉俣トーマス旭・小林武夫訳

『世界病氣博物誌』

原題名を「Great Medical Disasters」というこの本を開くと、「日本語版に寄せて」という著者の言葉の中に、「日本ではスコッチと同様、英国のユーモアもこよなく好まれていることがわかったのでこの本も楽しんで貰える」とある。目をめくると、「医学とは憶測から出発し殺人によって進歩する……アンソニー・カーライル」とか「医者とは職業人であり、殺人大学卒業生である……シドニー・スミス」といった文がいきなり目に飛びこんでくる。

びつくりしながら、次に目をやると、「人類は長い間、医学知識の欠如のためにずい分と苦労した。しかし、科学の輝かしい進歩が疾病をすっかり根絶したため、今は医療過誤に悩まされている。この医学の大失敗のカタログをみることで、この本を読む人は生きていてよかつたと思うであろう」とあり、この人をくつたような緒言がかえって本文の内容に期待をもたせる結果になっている。

著者は一九二一年生まれの麻酔科医で、現在は執筆活動に専念しているロンドンの医師である。日本語題名の副題にあるように、本書のタイトルに則した五十の話が十の項目にわけて載せられている。一つが数行の短い話から十数頁におよぶ話まで、その内容はいずれもバナード・シヨウも顔負けと

もいえるような皮肉とイギリス風ユーモアに満ちあふれている。

各項目のタイトルをみると、「惨事をもたらした医師達」とか「狂気の沙汰の医療ミス」といった恐ろしいものもあるが、内容的には示唆的、教訓的なものが多い。通常の医史学の本にでてくる多くのエピソードをある断面で切りとり、ユーモアで処理した本書はなかなか深みのある読み物と言えよう。

イギリスで死体解剖が重要な学問となってきた十八世紀、解剖学者に死体が高く売れるので、ついには標的を選んで死体を作成し売りつける商人まで生まれた話は、現代の臓器移植の問題点にも通ずる警告として読むこともできる。また、歴史の中で必ずとりあげられる細菌との闘いでは、ゼンメルワイズやペニシリンの話もさることながら、健康保菌者の第一号、チフスのメアリの話が面白い。腸チフス菌の保菌者メアリは料理人であったが故にひき起こす悲しいエピソードは、感染に対する対応の厳しさを示してくれる。その他死亡率三〇％という手術の話、性に関連した話、死亡の判断に関するものなど、その内容は多彩である。

イギリス独特のユーモアに必ずしも慣れているとはいえないわれわれにとつて、ときに難解と思われるような比喩や表現も出てくるが、読みごたえのある部分、さらっとした部分、ニヤニヤと読んでしまう部分など大いに楽しませてくれる本である。

「世界病氣博物誌」という日本語の題名と原著の「Great

「Medical Disasters」とは一致していないが、この本を読んでみると原題をそのまま和訳としなかつた訳者の意向と苦労がよくわかり、この本にふさわしい日本語題名がつけられたものと感心した。

この本の訳者は二人共耳鼻科の医師であり、あとがきの中で「この本は malpractice をあげつらつたものではなく、大部分は近代医学の発達の過程で起こつた悲惨でときにおろかな笑えぬエピソードを中心としたものである」と述べている。本書の著者は皮肉、ユーモアのセンスのみならず大変な博學で、記述の内容に関連して聖書、古典などが縦横無尽に引用され、その内容はときに読む側の知識不足が気になる程のものである。この本を訳すにあつて大変な苦労があつたと想像できるが、訳者は読者の立場を十分に考慮して、原著にはない写真や挿絵をいれ、また注釈を各所に加えてくれたため、全体が大変読みやすいものに仕上がっている。

ユーモアと皮肉と示唆にあふれた表現で、医学のきわめて重要な一面を歴史的にふりかえつた本書が、臨床家は勿論これから科学を追求しようとする若い多くの医師達にも読まれることを願うものである。

〔時空出版、東京都文京区小石川四一八—三、電話〇三—三三八
二—五三—三、一九九一年、三〇〇頁、定価 二〇〇〇円〕

（山本 修三）

杉立義一著『京の医史跡探訪 増補版』

杉立義一氏はこのたび『京の医史跡探訪』の増補版を思文閣より発刊された。初版本が発行されてより六年になる。著者は精細丹念な探訪の跡を、写真図解入りで達意の文章を以て詳述され、かつてないユニークな、親しみと温かさのこもつた実録書として好評を博した。歴史物の単行本が数年にして版を重ねるといふことは珍らしいことである。今回は、初版本の百項目に新たに二十六項が増補され、目新しく内容がいかに豊富となつている。

著者は昨年京都における日本医学会総会の医学史展示に当り、「医学の転換史を訪ねて」を担当し、また第92回日本医学学会総会々々長として会長講演を行い、永年に亘る研究を集成して『医心方の伝来』を公刊された。それらの功績により、昨年度日本医師会最高優功賞をめでたく受賞された。

本書の巻頭に図示されているように、京を洛中と洛外に分ち、更に各々を四区分し、総数一〇〇項の医跡が紹介され、新たに巻末に増補した二六項の史跡が追加された。

筆者が今まで訪問した京都の医史跡を追想し、筆者に関わりをもつことのみで申し訳ないことであるが、番号順に紹介しながら追記し、本書の推薦をさせて頂くこととした。

○

(2) 嵯峨釈迦堂、清涼寺